

# 山晋像真人上祐天

山晋像真人上祐天の開創 (一)

伊藤 丈

享保四年（一七一九）二月十七日、吉祥快晴の初春、龍土町（麻布）禅室より善久院へ、開山大僧正祐天上人の真像、舍利、舌根が、一の弟子祐海を侍者に入院した。

早朝五時（八時）、龍土町を発った行列百余名は、御葉園橋より白金台町行人坂へ出て、さらに目黒の紅葉の茶屋を経て大島明神の前通り、ここからさらに下村正覚寺にかかり、やがて善久院へ着到、表門より行列は境内に入った。

道中、行列は祐海を初めとする僧衆が、おごそかに衣に身をつつみ、ゆるやかに行道した。

先乗りは、宝松院、その左右に足軽が二人、次に提香炉を持つ弁瑞と雄弁、あとにそれぞれ所化五人、次に右に檀的、利億、官隆、祐意、南嶺、観岡、祐億、左に随音、天歴、祐吟、林碩、秀音、在胤、春貞、中央に、祐天上人の真像、舍利、舌根、すぐうしろに、香誓祐海、その左右に、伴僧おのおの二人、次に祐益、祐達、侍四人と小者一人、左右に足軽が

それぞれ一人、次に、増上寺役者円龍和尚、同じく安養院、学頭の利天和尚、了槃和尚、春林寺、新光明寺、大信寺、正源寺、本願寺、清巖寺、法音寺、さらにあとに、寺社方大八木玄隆、手嶋真西、桜井金右衛門、川井七兵衛、加藤善次郎、大仏師竹崎石見、世話人永井三右衛門、次に、押馬上に小笠原喜之丞、しんがり、は、胴勢、若党、挟箱、小者、合羽箱、堤灯待ちとつづいた。

この他には、浄土宗の僧ばかりか、他宗の僧そして江戸市中の人人までも、その行列につき従い、供のものその数おびただしく、あまつさえ、道に出て行列を拝む老若男女が限らないほどである。

途次、その慶固には、高松中将より小笠原喜之丞同組の足軽二十余人の供養があり、また、芝西応寺、月界院、大奥との連絡係りおか祢姥は先に善久院にて行列を待ち、昼九時、百余人の行列は当山に入った。

ほどなくして、厳肅に祐天上人の真像、舍利、舌根を新仏殿（旧本堂）に安置、

それより入院の儀式が始められた。先ず、寺院方が二列に列し、酒水、入堂、鑽、四奉請、四誓偈、阿弥陀経、念佛回向が修せられ、祐天上人を慕って境内に参集した九百余人の道俗に、三方十念が授けられた。

享保七年四月五日、八代吉宗は、月光院（七代家継母）からの善久院を祐天寺と改唱したいという祐海の切なる願いを聴くと、ただちにそれに同意する旨を月光院に伝えた。このことから、翌六日、この公許が寺社奉公松平对馬守の邸において、土井伊豫守、牧野因幡守列席のもと、对馬守より直に、祐海に申し渡された。